

たくましく生きる力と豊かな心を持った児童の育成 ～大口町立大口北小学校の実践から～

子供を知るために

Q-U講座で子供、学級の様子をキャッチ



Q-Uの見方を学ぶ講座を、講師招いて行っている。子供の姿を分析的な目で捉え直し、「自分が好き」「相手が好き」と思える学級づくりを目指して、教員も学び合っている。

わいわいタイム



子供の下校後に「わいわいタイム」と称し、職員室でミニ研修会を行っている。子供の情報交換や学級ですぐに生かせるSSTの研修を行っている。
何でも話せる明るく温かい職員室の雰囲気が子供理解のベースとなっている。

子供の主体的な活動のために

北小「Small Talk」で対話力アップ



低学年から取り組み、系統性をもって対話力の育成に努めている。対話の楽しさ、難しさを味わいながら、子供は認める、認められる相互の体験を積み重ねている。

対話力の高まった子供は自らの考えを伝えようと、意欲的に授業に参加している。

「バックワードデザイン」による授業づくり

単元終末に目指す子供の姿を具体的に想定した上で単元を構想している。(バックワードデザイン) 学びの必然性を意識することで、子供の主体性を大切に単元構想を組むことができ、意欲的に活躍する子供の姿を生み出している。

地域と共に子どもの成長を支え、喜ぶ

【大口町の伝統文化(総合的な学習の時間3年)】
ふるさと大口をもっと知り、もっと好きになってもらうこと、そして鍛えてきた「話す」「聞く」力を実践する場として、地域の伝統に触れる体験を行っている。

話すことに自信をもって、堂々と地域の方と話をする子供の姿が見られる。地域の方も落ち着いた子供の物言いをほめ、認めてくれている。顔が見え、実物に触れての交流は、子供の活動の幅を広げ、追求意欲を高めている。地域への興味、愛着を深めるよい機会となっている。

子供の真剣な表情が頼もしい。この子たちが引き継いでくれるならもっと頑張らなければいけない。



地域の方が子供の頃からこの山車はあったんだ。もっとこの町のことを教えてもらいたいな。

子供の活躍を認めるために

北っ子学習発表会



総合的な学習での追求の成果を発表する北っ子学習発表会。考えを伝えることが好きな子供たちが、張り切って自分たちの追求の成果を発表していく。

見に来てくれた人たちにちゃんと伝わったみたい。うなずいて聞いてくれたよ。

異学年集団での活動

「低学年の子供は高学年の子供のまねを、高学年の子供は低学年の子供のお手本に」そんな当たり前の日常の中にも、温かな関わりが生まれている。

今日は、ほうきを持ち方を教えるよ。みんな一生懸命でうれしいよ。先生から「教え方が丁寧だね」とほめられたよ。



お兄さんがわかりやすく教えてくれたので、掃除が上手になったよ。家でもやってみよう。

自己有用感・自己肯定感を高め、 絆を感じる集団づくりの在り方

ぎずな

学校は、どの子供も安心して過ごすことのできる温かい居場所でなければなりません。どの子供も認められ、自信をもってできることを増やし、仲間と共に生きる力を育てていくことができる、どの子供も通いたくなる魅力ある場所であることが大切です。

魅力ある学校であるためには、そこに過ごす子供が、自己有用感・自己肯定感を高めることが大切です。そして学校・学年・学級が、絆を感じる集団であることが大切であると考えました。

そこで、本リーフでは、魅力ある学校の実現を目指して、「自己有用感・自己肯定感を高める」、「絆を感じる集団を育む」ための五つの視点を紹介します。

自己有用感・自己肯定感を高める

他人から認められた、自分は役に立っているという「自己有用感」と、自分のことが好きであるという「自己肯定感」をバランスよく高めていく必要があります。

視点1

どれだけ子供のことを理解しているか

視点2

子供が認められる機会を大切にしているか

温かい居場所

魅力ある学校

どの子供も通いたくなる学校

視点3

「共に伸びる」を意識した教育活動となっているか

視点5

子供同士が活躍を認め合える場を用意できているか

視点4

「主体的な活動」を導き出せているか

互いをよく知り、それぞれの力を発揮しながら、尊重し合い、共に成長する喜びを実感し合える仲間である「絆を感じる集団」を育む必要があります。

絆を感じる集団を育む

自己有用感・自己肯定感を高める

視点1 どれだけ子供のことを理解しているか

ポイント1

子供の今の姿を捉えよう

- ・子供の表情、声、服装等、子供の小さな変化も敏感にキャッチできるよう、常にアンテナを高くしていきましょう。
- ・学級の全ての子供と対話ができるように時間をつくりましょう。
- ・Q-Uテストやクレペリン検査等の心理テストや、生活アンケート等を活用し、子供の今と支援方法を知る手がかりとしましょう。

ポイント2

結果をほめるより、その過程を理解し、認めよう

- ・目の前の子供を肯定的に捉えましょう。
- ・子供に寄り添い、結果だけではなく、成長の過程を見るようにしましょう。
- ・的確なタイミングでの温かい声かけで、わかってもらえているという安心と自信を子供に与えましょう。
- ・教員の関わり方や内容から、子供は他者との関わり方を学んでいると心得ましょう。

ポイント3

これまでの生活の様子を知り（引継ぎ）、職員間で情報の共有を図ろう

- ・子供のよさや背景も含め、丁寧に情報の引き継ぎをし、子供への切れ目ない支援を維持しましょう。
- ・いじめ不登校対策委員会等の各種会議や校務支援システム等のデータを活用し、情報の共有を図りましょう。
- ・個人で情報を抱え込まず（抱え込ませず）複数の目で子供を捉えるようにしましょう。

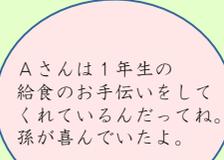


視点2 子供が認められる機会を大切にしているか

ポイント4

他を認める雰囲気を生みだそう

- ・よいところみつけ、感謝状の交換等、友達のよさを見つめる機会をつくりましょう。
- ・教師が手本となるような認め方を心がけましょう。
- ・帰りの会で紹介するなど、どの子供も認められているという実感が味わえる機会をつくりましょう。



ポイント5

子供のよさを保護者、地域と共有できる体制を構築しよう

- ・健全なる子供の育成には地域と共に子供を育むことが大切であることを意識しましょう。
- ・学校の目標を地域と共有し、開かれた学校・開かれた生徒指導の実現を目指しましょう。
- ・学校新聞やHP、行事等を活用し、子供が今、力を入れて取り組んでいることを地域の方にも知ってもらいましょう。そして地域の方にも子供を共に応援するサポーターになってもらいましょう。



温かい居場所

魅力ある学校

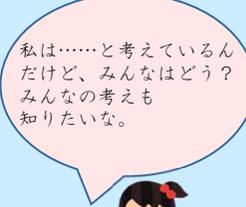
どの子供も通いたくなる学校

絆を感じる集団を育む

きずな

視点3

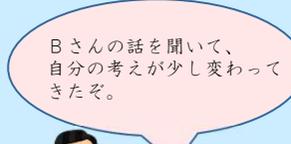
「共に伸びる」を意識した教育活動となっているか



ポイント6

グループで話し合う目的を明確にしよう

- ・子供にどのような力をつけるために話し合うのか、目的を明確にしましょう。
- ・活動前と活動後の子供の姿を具体的にイメージし、計画を立てましょう。
- ・個人の中に伝えたい思いを醸成した後に話し合いを行いましょう。



視点4

「主体的な活動」を導き出せているか

ポイント7

教師の「させたい」を、子供の「やりたい」へ変えよう

- ・必然性のない活動は子供を受け身にします。自らやりたいという子供の前向きな気持ちを生むために、活動に連続性・必然性を持たせましょう。

ポイント8

子供の「自分たちでやるんだ」という気持ちを支えよう

- ・明確な目標をもって活動に向かうように促しましょう。
- ・集団の目標（学級目標等）を丁寧に決め、常にその目標や改善点を意識させましょう。

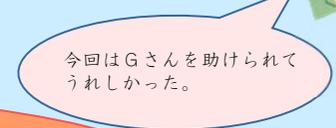
視点5

子供同士が活躍を認め合える場を用意できているか

ポイント9

振り返りの場を大切にしよう

- ・活動後のアンケートや振り返りをする際、友達と読み合ったり、コメントを書き合ったりする活動を取り入れる等、自分の変化・成長、そして、友達の変化・成長を感じ合うことができるようにしましょう。
- ・「がんばってよかった」の実感や喜びが、次の活動への意欲・成長の連続につながる大切な思いであることを意識しましょう。



絆